

東日本大震災3年

「今」

を見つめて (後)

被災者に寄り添って

患者との距離が近付いた

巨理町

仙台空港から南へ20
き、宮城県巨理町新町の
市街地の空き地に、プレ
ハブ造りの診療所が建っ
ている。震災後、沿岸部
の荒浜地区から移転した
鳥の海歯科医院だ。院長
の上原忍医師(60歳)が
診療を再開して3月で2
年半を迎えた。

「先生、いつから治療
しても大丈夫ですか。早く
再開してください」
「一医療人として、こ
の地域で果たす役割がま
だまだある」と思った。
患者の言葉に背中を押さ
れ、診療所の再建を決
意。スタッフも全員が無
事だった。

一日でも早い再開をめ
ざし、沿岸部から5キロ離
れた市街地の空き地を借
る。流失を免れたカルテ
を頼りに、被災直後から



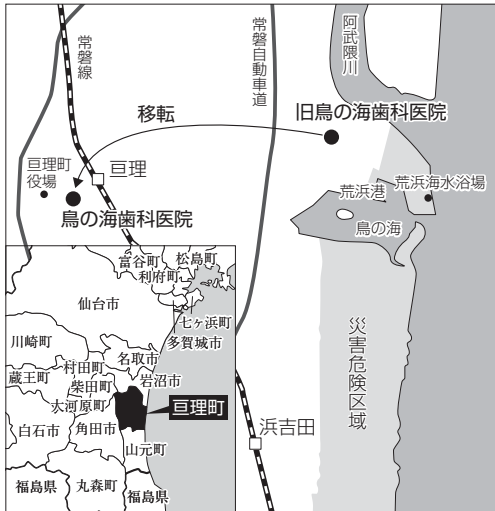
上：震災当時の巨理町の様子。正面奥に「鳥の海歯科医院」が写っている。中：診療再開までの道のりを話す上原忍医師。下：2011年9月に再建した仮設診療所

巨理町 人口3万3千。
東北一のイチゴの生産量
を誇る。震災では町面積
の約5割が浸水した。

「自然災害保険の給
付金や借金で、仮設」の
診療所を建設するなか
で、公的支援の必要性を
痛感した。一から機材を
そろえ、震災から半年後
に何とか診療再開にこぎ
つけた。

「震災前よりも患者さ
んの生活背景が見えるよ
うになり、距離が近くな
った」と上原医師。それ
だけに、仕事や家族を失
い、仮設住宅に引きこも
りがちな患者が少なくない
ことが気掛かりだ。

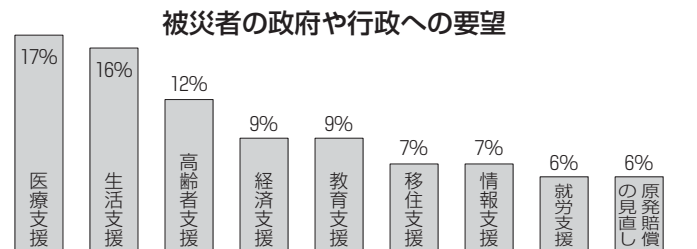
「60歳にしてまた借金
ができてしまいました。
診療所に来ることでも患者
さんが少しでも肩の荷を
降ろす、そんな診療を心
掛けたい。被災者の希望
が叶う復興のために、や
はり『待合室から医療を
守る』政治を変える運動
が必要でしょうね」



「震災前よりも患者さ
んの生活背景が見えるよ
うになり、距離が近くな
った」と上原医師。それ
だけに、仕事や家族を失
い、仮設住宅に引きこも
りがちな患者が少なくない
ことが気掛かりだ。



巨理町では診療所再建までの努力や苦労について聞いた



(毎日新聞3月11日付「被災3県アンケート」から作成)

震災を経たからこそ

新聞部・三木正弘



被災地を訪問して

巨理町では3年たった
今もプレハブの仮設住宅
で暮らす人は2千人に上
る。被災した住民・患者
は、生活再建に追われて
どうしても受診が後回し
になりがちだという。

上原先生も、歯周病を
悪化させて来院した年配
の患者や、建設関係の特
需で仕事が忙しく多歯齶
蝕を放置していた患者の
事例を語られた。ストレ
スからの噛み締めで、歯
が浮いたり腫れたりする
人が多いように感じると
も話されていた。

震災4年目を迎え、被
災住民の要望では、医療
支援が一番多いという調
査結果もある。宮城県で
は昨年3月に窓口負担の
減免措置が打ち切られて
いるため、経済的な理由
から受診抑制が起って
いることは容易に想像で
あった。

診療所が全壊しても、
新たな借金をしても、そ
れでも前に向かって、患
者と真摯に向き合おうと
する地域医療人の矜持が
あった。

被災地では行政の土地
利用規制などによって、
診療所移転を余儀なくさ
れることや、せっかく診
療所を再建しても経営困
難となり閉院した事例も
あると聞いた。

保険医協会などが要求
し、国や宮城県から歯科
医療機関へも再建支援の
補助金が支給されたが、
十分とは言えない。

困難な環境に直面しな
がら、上原先生は「震災
前は、歯科治療を通して
住民の役に立っているこ
とだけで満足していた。
震災を経たからこそ、患
者さんの暮らしも視野に
入れた、全人格的な医療
」について考えるよう
になった」と語った。

診療所が全壊しても、
新たな借金をしても、そ
れでも前に向かって、患
者と真摯に向き合おうと
する地域医療人の矜持が
あった。